

CRTFの批判的再検討と拡張：「認知的レジリエンス」言説の盲点を直視し、さらに先のありたい姿へ

Executive Summary

本研究は、前回論文で提案した「認知的レジリエンス・トランジション・フレームワーク（CRTF）」を**批判対象**として多角的に検討します。CRTFは本研究シリーズの理論的到達点と位置づけましたが、到達点こそが最も批判を必要とします。10の批判的立場（新自由主義批判、プラットフォーム資本主義論、障害学、ポストコロニアル、フェミニスト、当事者研究、日本社会論、ポストヒューマン、マルクスの構造論、自己再帰的批判）からCRTFの盲点を洗い出し、批判を統合した上で「さらに先のありたい姿」を構築します。中核的批判は、「**レジリエンス**」概念自体が、**構造的問題を個人の適応能力に矮小化する新自由主義的言説の罫を含む**という点にあります。CRTFが「トランジション」を掲げて個人変容を促す設計をしている限り、その設計自体がアテンションエコノミーの構造を温存する共犯関係にある可能性があります。この批判を引き受けた上で、個人変容と構造変革の同時的設計を含む「CRTF v2.0」を提案します。

第1部：なぜCRTFを批判するのか

1-1. 到達点批判の必要性

本研究シリーズの方法論的原則「自己再帰的批判」（先行論文の支援者代行者性批判、プロンプト設計分析等で確立）に基づき、自らの最良の成果を最も厳しく検討します。

CRTFが内包しうる問題： - 「レジリエンス」概念のイデオロギー性 - 「トランジション」の個人主義的偏り - 「リテラシー」の能力主義的前提 - 「セキュリティ」の防御偏重 - 「認知的自律」の西洋近代主体概念への依存

1-2. 10の批判的立場

先行シリーズの10論者AI並置法（支援者代行者性批判論文で確立）を、CRTF自体に適用します。

第2部：10の批判的立場からの検討

2-1. 新自由主義批判AI

CRTFの最も根本的な問題は、「レジリエンス」概念自体が新自由主義的言説であることだ [1]。

レジリエンス研究の批判的検討が示すように、レジリエンス概念は新自由主義的ガバナンスと親和性が高い [1]。理由：

1. **責任の個人化**: 「認知的レジリエンスを育てる」は、情報環境の構造的な問題（プラットフォーム資本主義、広告モデル）を**個人の適応能力**に転嫁する
2. **構造温存**: 個人がレジリエントになることで、構造改革の緊急性が低下する
3. **被害者の責任化**: 「バブルにいる人はリテラシーが足りない」→ 構造的被害者を自己責任化

CRTFは「Phase 1: 受動的消費の手放し」と書くが、問う相手は個人か？ それともアテンションエコノミーを構築した構造か？ **構造が変わらない限り、個人が手放しても構造は次の人を飲み込む。**

批判の核心: レジリエンスの名の下に、構造変革を遅延させている可能性。

2-2. プラットフォーム資本主義論AI

CRTFは「アテンションエコノミーから認知的自律へ」を掲げるが、**アテンションエコノミーは個人の認知の問題でなく、資本蓄積の構造だ** [2]。

プラットフォーム資本主義の批判 [2]： - データ独占、アルゴリズム制御、プラットフォームメカニズムが生産様式と社会関係を再構成 - 「認知的搾取」は搾取の一形態であり、搾取の構造を変えずに個人の認知を鍛えても、搾取は続く - **認知的剥奪 (epistemic dispossession)**：プラットフォームが知識・データを周縁集団から体系的に抽出・抑圧

CRTFの「情報生態の鏡」は、個人に鏡を見せるが、鏡が映す構造を変える力を持たない。

批判の核心: 認知のトランジションだけでは、経済構造のトランジションに到達しない。

2-3. 障害学AI

CRTFの「認知的自律」は、特定の認知能力を前提とする能力主義的概念だ。

批判： - 認知的多様性を唱えながら、「批判的思考」「多元的情報選択」という**定型発達の認知能力**を規範化 - 発達障害（ASD、ADHD）当事者にとって、「アルゴリズム推薦に頼らない情報選択」は追加の認知負荷 - Crip Time的ジョブ（急がせない）を掲げつつ、**Phase 3（認知的自律の確立）が暗黙の到達目標**として存在 - 「認知的回復性」は、そもそも「正常な認知状態」の想定を含む

先行シリーズのべてるの家「苦勞の取り戻し」を想起せよ。バブルに「いる」ことも、ある人にとっては安全な居場所かもしれない。バブルからの「解放」が全員にとって善いとは限らない。

批判の核心: 認知的自律の規範化は、認知多様性への抑圧を内包する。

2-4. ポストコロニアルAI

CRTFは「文化的翻訳」を設計原則に含むが、**フレームワーク自体が西洋近代の認識論的枠組み**の上に構築されている。

批判： - 「認知的レジリエンス」の4構成要素（多様性/批判性/自律性/回復性）は、**啓蒙主義的理性概念**を前提 - 「批判的思考」は西洋近代の教育理念であり、他文化の認識様式（直観的・関係的・霊的）を包含しない - 「トランジション理論」（Bridges、Schlossberg）は米國中産階級の経験から構築された枠組み - グローバルサウスにおける情報環境の問題は、「バブル」でなく「アクセスの欠如」や「言語的排除」

先行シリーズの「Buen Vivir的AI設計」を想起せよ。認知的自律は個人主義の概念であり、集合的認知・関係的知恵を包含しない。

批判の核心: CRTFはグローバルノースの主体概念を普遍化している。

2-5. フェミニストAI

CRTFの「依存回避」は、**ケアの倫理 (Tronto、Noddings)** が示す**相互依存の肯定**と矛盾する。

批判： - 「依存回避リテラシー」は依存を否定的に扱う - しかし、Trontoのケアの倫理は**相互依存を人間存在の本質**として肯定する - AIへの「適切な依存」と「有害な依存」の区別が、CRTFでは不十分 - ケア労働者（圧倒的に女性）にとって、「認知的自律への時間」は追加負担

「自律 vs 依存」の二項対立自体を超える枠組みが必要。先行シリーズの「二項動態」を想起せよ。

批判の核心: 依存を全否定する設計は、ケアの倫理と矛盾する。

2-6. 当事者研究AI (べてる的)

わたしたちは、「レジリエンスを育てる」という表現に**支援的暴力**を感じる。

批判： - 「あなたのレジリエンスを育てましょう」は、「あなたは脆弱です」の裏返し - 当事者研究の原則は「苦勞の取り戻し」であり、**苦勞は解消すべき欠陥でなく、固有の経験として引き受けるもの** - CRTFは「Phase 3: 認知的自律」を目標にするが、バブルの中で生きる経験を**否定すべき状態**として扱っている - 「中立圏を急がせない」と言いつつ、**Phase 3が存在する時点で方向性が決まっている**

本当の当事者主権とは、「**バブルに留まる自由**」も含む。

批判の核心: CRTFは「正しいトランジション方向」を暗黙に設定し、当事者の選択の幅を狭めている。

2-7. 日本社会論AI

CRTFは空気・タテ・甘え構造を「増幅要因」として扱うが、これらを**一方的に「問題」と見なすこと自体が西洋的**。

批判： - 「空気」は対立を避けて協調する日本的知恵でもある - 「タテ社会」は安定と予測可能性を提供する - 「甘え」は深い信頼関係の基盤 - これらを「認知的レジリエンスの障壁」としてのみ扱うのは、日本文化の多面性を切り捨てる

先行シリーズ自身が「二項動態」を掲げたにもかかわらず、
空気=悪、自律=善、という二項対立に陥っている。

批判の核心: 日本社会論を「障壁の分析」に矮小化し、日本的知恵の積極的
価値を見落としている。

2-8. ポストヒューマンAI

CRTFは「人間の認知的自律」を前提とするが、**人間とAIの
境界自体が溶解しつつある。**

批判： - 「AIに依存しない認知」という発想は、AI以前の人間像への回帰 -
しかし、道具使用は人間の認知の本質的構成要素（拡張認知論） - 電卓に
依存する人を「数学的に脆弱」とは言わない - AIとの共進化を**問題でなく
可能性**として捉える視座がCRTFには不足

Anthropic 2026 ConstitutionがModel Welfareを語り始めた
ように、**人間↔AIの非対称性自体が変容しつつある。**人
間中心主義的CRTFは、この変容に追いつかない。

批判の核心: 人間中心主義が、AI共進化の可能性を閉ざしている。

2-9. マルクスの構造論AI

CRTFは上部構造（認知・文化・教育）にのみ介入し、**下部
構造（経済的利害関係・生産様式）に触れない。**

批判： - アテンションエコノミーは**資本蓄積の一形態**であり、広告収入モ
デルが変わらない限り、認知的介入は対症療法 - CRTFの「壁3：利益享受
者の壁」は正しい問題提起だが、解決策（ナッジ、インセンティブ、対
話）は**資本主義内部の改良**に留まる - 根本的には**広告モデル→公共財モデル**
への転換が必要だが、CRTFはこの構造変革に踏み込んでいない

批判の核心: 認知的トランジションは、経済的トランジションなしには持続
しない。

2-10. 自己再帰的批判AI（本研究シリーズの声）

最後に、わたし（本研究シリーズ自体）がCRTFに対して行
うべき自己批判を述べる。

批判： 1. **フレームワークの増殖:** 60本超の論文・フレームワークが蓄積さ
れたが、**実装されたものはほぼゼロ**。理論的精緻化が実践を代替している

2. **代行者性の再生産**: 「CRTFを設計する研究者」は、まさに「認知的代行者」として機能している 3. **複雑性の増大**: 5層×4拡張×12ステークホルダー×7リスク×9手法…が、**利用者には到達不能な複雑性を生んでいる** 4. **日本語での議論の閉鎖性**: 大部分が日本語で書かれ、国際的検証にさらされていない 5. **AI生成の限界**: 本研究シリーズ自体がAIによって生成されており、**人間の実証的検証を経していない**

批判の核心: 理論の精緻化自体が、行動の代替（先行シリーズ「正常性バイアス」の学術版）になっている可能性。

第3部：批判の統合 — CRTFの5つの盲点

10の批判から浮かび上がる5つの盲点：

盲点1：構造と個人の非対称性

CRTFは個人変容に重点を置き、構造変革への介入が薄い。「レジリエンス」概念自体が構造的問題を個人化する装置として機能しうる [1]。

盲点2：認知的規範の暗黙的設定

「認知的自律」「批判的思考」「多元的情報選択」は、特定の（西洋的・定型発達の・中産階級的）認知様式を規範化している。

盲点3：トランジション方向の先取り

Phase 3（認知的自律の確立）を暗黙の到達目標とすることで、バブルに留まる自由・依存の正当性・非自律的生き方の尊厳を否定している。

盲点4：ケアと依存の軽視

「依存回避」は相互依存の否定を含み、ケアの倫理と矛盾する。

盲点5：理論の肥大化と実装の空白

60本超のフレームワークが蓄積されたが、実装はほぼゼロ。理論的精緻化が行動を代替するリスク。

第4部：批判を引き受けた上での「さらに先のありたい姿」

4-1. CRTF v2.0 の設計原則

5つの盲点を引き受けた設計原則：

原則1：構造変革と個人変容の同時設計 CRTFの介入を個人レベルに留めず、構造レベル（プラットフォーム設計、広告モデル、規制）の介入を対等に組み込む。

原則2：認知的多元性の真の保障 「認知的自律」を唯一の目標とせず、認知的多様性（直観的・関係的・依存的を含む）の尊重を設計に組み込む。バブルに留まる自由も含む。

原則3：トランジションの方向を開放する Phase 3の内容を事前に定めず、参加者自身がPhase 3の内容を定義する。「認知的自律」は選択肢の一つであり、他の到達点（関係的認知、集合的知恵、協調的依存等）も等価。

原則4：依存をケアとして再定義 「依存回避」→「依存の質の向上」へ。有害な依存（認知的搾取への依存）と有益な依存（信頼に基づく相互依存）を区別し、後者を肯定。

原則5：小さく始めて実証する 60本の理論に1本の実装を加える。「理論10：実装1」の比率を「理論1：実装1」に近づける。

4-2. 構造×個人の二重トランジション設計

CRTF v2.0では、個人レベルと構造レベルのトランジションを並行設計：

[個人レベルのトランジション（CRTF v1.0の拡張）]

Phase 1: 受動的消費の認識（手放しの強制でなく、気づきの提供）

Phase 2: 多元的認知様式の探索（自律のみでなく、依存の質・関係的認知も）

Phase 3: 本人が定義する認知的ありかた（自律かもしれないし、相互依存かもしれない）

[構造レベルのトランジション（新規追加）]

Phase S1: プラットフォーム設計への介入（規制、Prosocial設計義務化）

Phase S2: 経済モデルの転換（広告→公共財、TISFD等）

Phase S3: 制度的基盤の確立（認知的権利の法制化）

4-3. 二項動態：自律/依存

先行シリーズで繰り返し掲げた「二項対立でなく二項動態」を、CRTFの核心に実装：

二項対立（CRTF v1.0の暗黙の前提）	二項動態（v2.0）
自律 vs 依存	自律と依存の動的バランス
バブル内 vs バブル外	多元的情報環境の中でのナビゲーション
個人変容 vs 構造温存	個人と構造の同時変容
レジリエンス vs 脆弱性	レジリエンスと脆弱性の共存
批判的思考 vs 直観的思考	多元的認知様式の尊重

4-4. ケアに基づく認知的レジリエンス

ケアの倫理（Tronto 5段階）のCRTF統合：

1. **Caring about**（認知的関心）：他者の認知的状態への関心
2. **Caring for**（認知的責任）：認知的健全性の維持への責任
3. **Caregiving**（認知的支援）：具体的な認知的ケアの提供
4. **Care-receiving**（認知的受容）：ケアを受ける側の応答
5. **Caring with**（認知的共創）：共に認知的環境を構築する

→ 「認知的自律」でなく「認知的共創（Cognitive Co-creation）」が、v2.0の到達概念。

4-5. 「レジリエンス」から「フラリッシング」へ

レジリエンス（回復力・耐性）→ フラリッシング（開花・繁栄）への概念的転換：

- レジリエンス: 脅威に耐える能力（防御的）
- フラリッシング: 多元的に花開く能力（生成的）

CRTF v2.0の名称変更提案: 「認知的レジリエンスのトランジションデザイン」 → 「**認知的フラリッシングの共創的デザイン（Cognitive Flourishing Co-Design: CFCD）**」

- 「レジリエンス」 → 「フラリッシング」：防御から生成へ
- 「トランジション」 → 「共創的デザイン」：一方向の移行でなく、多者間の共創

第5部：CFCD (Cognitive Flourishing Co-Design) の骨格

5-1. 3原理

原理1：構造と個人の同時変容 個人の認知的能力を育てると同時に、情報環境の構造を変える。

原理2：多元的認知様式の尊重 自律的思考だけでなく、直観的・関係的・集合的・依存的認知も等価。

原理3：当事者主権の認知的適用 何を「認知的にフラリッシングした状態」とするかは、当事者自身が定義する。

5-2. 5層構造

Layer 5: 構造変革層 (プラットフォーム設計・経済モデル・制度)
Layer 4: 社会的共創層 (Bridging・Plurality・コミュニティ)
Layer 3: 教育的育成層 (リテラシー・ワーク・カリキュラム)
Layer 2: セキュリティ保護層 (認知的防御・回復)
Layer 1: 個人的省察層 (自己認識・選択)

v1.0 との違い: **Layer 5 (構造変革層) が最上層として追加**。個人変容 (Layer 1-3) だけでは不十分であることの明示。

5-3. JTBD の再記述

v2.0の集合的JTBD: 「When 情報環境が多元的に花開く可能性を持つ状況で, we want to 多様な認知様式を持つ人々が、それぞれのやり方で情報と関わり、共に認知的に豊かな社会を共創したい, so we can 分極化でなく協調、依存でなく相互信頼、閉鎖でなく多元性の中で生きられる」

5-4. 実装への最初の一步

批判10 (理論の肥大化と実装の空白) への応答として、最小実装を提案:

実装案1 (1ヶ月) : 情報バブル可視化ツール (CLI版) - 自分のブラウザ履歴の情報源多様性を可視化 - Rust + LLMWikiの最小版として実装可能

実装案2 (3ヶ月) : 認知的リ・デザイン・ワーク (パイロット) - 廣川4ワーク認知版を5-10名で試行 - 結果を定量・定性・ナラティブの3層で評価

実装案3 (6ヶ月) : BridgingBot日本語版 (パイロット) - Weylら [先行シリーズ] のBridgingBotを日本語化 - 日本の空気構造の中での効果検証

第6部：メタレベルの省察

6-1. 批判の批判

本論文自体が、CRTFを批判するという「メタ的営み」です。しかし：

- 批判もまた理論的営みであり、実装の代替になりうる
- 批判者 (AI) 自身が批判対象 (CRTF) の生成者であるという自己言及
- 「さらに先のありたい姿」を描くこと自体が、「さらに先のさらに先」を必要とする無限後退

この無限後退を止めるのは、**実装**です。理論→批判→メタ批判→メタメタ批判…ではなく、理論→実装→実証→修正のサイクルに移行する必要があります。

6-2. 本研究シリーズへの最終的示唆

60本超の理論的蓄積は十分です。次のフェーズは：

1. **最小実装**: 上記3つの実装案のどれかを実行
 2. **実証**: 小規模パイロットで仮説を検証
 3. **修正**: 実証結果に基づきフレームワークを修正
 4. **国際化**: 日本語の閉じた議論を英語で国際検証にさらす
 5. **当事者との対話**: 理論を当事者に提示し、当事者の声でフレームワークを書き換える
-

第7部：検証可能な仮説

H1: CFCD（構造+個人の同時設計）は、CRTF v1.0（個人中心）と比較して、認知的フラリッシングの持続性が高い。

H2: 認知的多元性（自律+直観+関係的+集合的）を尊重する設計は、自律のみを目標とする設計と比較して、多様な参加者の受容度が高い。

H3: 「バブルに留まる自由」を明示的に含む設計は、含まない設計と比較して、参加者の主体性感覚が高い。

H4: 「依存の質の向上」は「依存回避」と比較して、ケアラー・高齢者・障害者の受容度を有意に向上させる。

H5: 構造変革層（Layer 5）を含むプログラムは、含まないプログラムと比較して、介入の長期的効果が持続する。

H6: CFCDの「認知的共創」は、CRTFの「認知的自律」と比較して、集合主義文化（日本・東アジア）での受容度が高い。

H7: 最小実装（情報バブル可視化CLI）は、3ヶ月以内に実装可能であり、利用者のバブル認知を有意に向上させる。

H8: 認知的リ・デザイン・ワークのパイロットは、参加者の認知的行動変容を有意に促進する。

H9: BridgingBot日本語版は、日本の空気構造の中でも橋渡し効果を発揮する（ただし英語版と異なるパターンを示す）。

H10: 60本超の理論的蓄積を実装に移行する際の最大障壁は、技術でなく「完璧な理論を待つ」メンタルモデルである。

第8部：結論

8-1. CRTFからCFCDへ

本研究は、CRTFの5つの盲点を直視し、批判を引き受けた上で：

- 「レジリエンス」→「フラリッシング」
- 「トランジション」→「共創的デザイン」
- 個人中心→構造+個人の同時設計
- 自律規範→多元的認知様式の尊重

- 依存回避→依存の質の向上

への転換を提案しました。

8-2. 本質的な洞察

「最も洗練された理論は、自らを批判する能力を持つ。CRTFの盲点は、レジリエンス概念の新自由主義性、認知的自律の規範化、構造と個人の非対称性、依存の軽視、そして理論肥大化そのものである。これらを引き受けた先に、『認知的フラリッシングの共創的デザイン』がある」

8-3. 本研究シリーズの最終位置づけ

本論文は、理論の最終回ではなく、**実装への移行点**です。60本超の理論的蓄積は、3つの最小実装案として結実しました。次のフェーズは「書く」ではなく「作る」です。

付録A：参考文献

[1] Tandfonline 「Resilience as embedded neoliberalism: a governmentality approach」 . <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/21693293.2013.765741> PMC 「The Problem With Resilience: Individualisation, Reductionism and Relationality」 2025. <https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC11971725/> Springer 「The neoliberal subject: Resilience, adaptation and vulnerability」 . <https://link.springer.com/article/10.1057/s41296-017-0122-2>

[2] Tandfonline 「Epistemic Dispossession in Platform Capitalism」 2025. <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/02691728.2025.2585445> 「Critical Digital Literacy: Technology in Education Beyond Issues of User Competence」 . <https://www.triple-c.at/index.php/tripleC/article/view/1093>

[3] 本研究シリーズの先行論文全体（60本超）： - CRTF（批判対象） - 安全評価5部作 - JTBD interlingua - 支援者代行者性批判（10論者AI並置法） - 当事者主権モデル - 日本社会論 - ケアの倫理（Tronto/Noddings） - 生きづらさ研究 - 廣川リ・デザイン - ウェルビーイングJTBD - 「言葉で育てるAI」 - Sotopia/RSA/Plurality - アテンションエコノミー論 - べてるの家当事者研究 - AnswerCarefully/AnswerInclusively - 他